

そのことについては間違いない。要は、モーツアルトと年代の芸術家の中にも、「芸術家であったとしても金持ち」という者はいたのである。

ところで、ドヴォルザークが金持ちなのは、莫大な遺産を相続したからではない。モーツアルトが曲の売り切りで生計を立てていたのに対し、ドヴォルザークは自曲の著作権をきちんと管理し、著作権使用料で生計を立てていたのである。それは例えば、とある演歌歌手が著名な演歌の1曲だけでずっと生計を立てているのとはほぼ同じである。もし演歌が売り切りであったのであれば、過去の紅白歌合戦に出ていたド派手な衣装の代金で、彼女は当の昔に破産していたであろう。

モーツアルトは天才である。それは疑いようもない事実である。むしろ、天才過ぎたと言ってもよい。そして、それほど才能があったからこそ、たとえ売り切りであったとしても、何とか生計を立てていたのである(というより、もし彼が本当に庶民的な暮らしをしていたのであれば、それなりにお金を残せたはずである)。逆の見方をすれば、切り売りで困らないくらいに作曲の才能があったと、そういうことである。なので、権利を活用する必要など感じない。長所というのは、短所を作るものなのである。

一方、ドヴォルザークも音楽家として天才ではあるが、モーツアルトには及ばない。なので、もし彼が曲の売り切りで生計を立てようとしても、途端に創作が枯渇し、行き詰ることになる。曲の切り売りで生きていけないことは明白であり、それはドヴォルザーク自身もよく分かっていたであろうから、何とか食いつないでいくための別の方法を探す。まさに、「チャンスというのは、ピンチの顔をしてやってくる」のであり、曲の売り切りで生計を立てられるくらいの才能までは無かったことが、ドヴォルザークにとっては幸いし、彼をこの時代有数の金持ち音楽家にまで引き上げることになるのである。

実際、才ある者というのは、事務的な手続きをあえて取って権利を管理し、当該権利を活用して自らを守り、安定した収益を得ることを行わない。その必要性を感じないのだ。権利を取り、管理し、ときにはそれを主張し、活用することで、そこから収益を得るのは、弱者の側である。弱者というのは、自らの才能だけでは自らを守り切れないため、権利で

武装して、自らの立場を守る。そのことは、弱者自身がよく知っている。なので、弱者というのは、権利取得の必要性というものを感じている。

けれども、類稀なる天才モーツアルトは、その必要性を感じなかった。彼は、彼の極めて稀なる才能によって、著作権の活用などせずとも、自ら次々に創作される曲の売り切りで十分に生活をすることができたのである。もし彼が著作権で儲けることを考えていたのであれば、それこそ、どんな使い方をしたとしても使いきることができないような莫大な財を成したに違いない。けれども、彼はそれをしなかった。いや、できなかったのである。曲の売り切りで十分に喰えていたがために、著作権を利用する必要性など無かったから、それに気付くことができなかったのである。これが、モーツアルトがお金持ちになれなかった理由である。

こうしたことは、何もモーツアルトだけの話ではないし、単なる昔話でもない。今でも、そこかしこに見られる話である。例えば、極真空手を切り開いた偉大なる格闘家の大山倍達。もし彼に、「「極真空手」という名称について、商標登録したほうが良いですよ」と進めた弁理士が居たとしたならば、大山倍達氏から「何のために必要なのだ?!」と問われる。そして、「もし模倣者が現れたら、困るのではないのでしょうか?!」などと答えようものなら、おそらく大山倍達氏からは「俺以外の誰が、いったい“極真空手”を使うっていうんだ?! フン、馬鹿らしい! もしそんな酔狂な命知らずのやつがいたとしたら、俺の前に連れて来い。俺が退治してやる」と言われてしまったかもしれない。

いずれにしろ、全盛期の大山倍達氏にとっては、商標登録して極真空手を守る必要など、全く無いのである。それに、そんなときに、わざわざ命の危険を冒してまで極真空手を勝手に使うような酔狂な者も、無邪気な者も、存在しないであろう。けれども、実際には、弟子の一人が“極真空手”について商標登録をしてしまい、大山倍達氏の死後に、肉親との間で、それこそ骨肉の争いをしていることは、この業界でも周知のことである。

2. 資金化(マネタイズ)という考え方と、ビジネスの「成功のパターン」,「勝ちパターン」